

第〇章「衝動の暴発」

突き放し

オフイとの手合わせ――鍛錬場にて

夜伽――そんなに俺を高ぶらせて、どうするつもりなんだ

翌朝の鍛錬場にて

無言の先回り

無自覚な尋問

ある朝

貸したマント

戦いの前夜

勝利の夜、何回目かも忘れた口づけと指

アリエスの日記二

第〇章「衝動の暴発」

突き放し

あの夜から数日が経った。

アリエスの様子が気になって、あなたは鍛錬場を訪ねた。重い空気が漂う広間の中央で、彼は一人、戦斧を振るっていた。金属が空を切る低い唸りが、壁にこだまする。

「アリエス、昨日の傷は大丈夫？　ちゃんと手当てした？」

あなたの声に、彼の動きが一瞬止まった。しかし、すぐにまた戦斧が舞う。背を向けたまま、低い声が返ってくる。

「……来るな」

「え？」

「来ると言った。神殿にこもれ。それか、蛇と共にいろ」

突き放すような言葉の冷たさに、あなたは足を止めた。どうして——言いかけて、言葉
を呑み込む。彼の背中が、いつもより強張って見えたからだ。

「どうして——」

あなたが再び口を開くと、戦斧の柄を握る手にぎりりと力が込められた。

「俺のそばに來ないほうがいい。危険だからだ」

「危険って、何が——」

問いかけを遮るように、彼はようやく振り返った。紅い瞳が、あなたを真っ直ぐに射抜
く。その瞳には怒りと——ほんの少しの、戸惑いがあった。戦場で幾多の敵を屠ってきた

戦神が、たった一人の人間の前で、自分自身を制御しきれないことを自覚している——そんな表情だった。

「俺だ。俺が、お前にとって危険なんだ」

低く響く声。あなたは息を呑んだ。

「私は、あなたに危険なことなんて——」

「俺は戦うことしか知らん。加減もできん。お前のように、か細いものの扱いはわからん。壊すかもしれん」

言葉の一つ一つが、彼自身を切り裂くように鋭かった。そう言い放つと、彼は再び背を向ける。その声は、先ほどよりもずっと低く、掠れていた。

「……だから、来るな。お前は、俺とは違う場所にいろ」

◆ 追い返すにはあまりにも痛々しい背中を、あなたは見つめることしかできなかった。何か言おうとして——でも、言葉は見つからない。あなたはゆっくりと踵を返し、鍛錬場を後にした。

一人残されたアリエスは、戦斧を握る手がかすかに震えているのを感じていた。

「……これでいい。あいつが傷つくくらいなら、遠ざけておく方がいい」

そう呟いた胸の奥で、理解できない痛みが広がっていく。

（なのに——なぜ、胸がこんなに痛むんだ）

戦斧を握り直す。振り下ろす。また振り上げる。何度繰り返しても、あの指の感触は消えてくれなかった。

|
オフィとの手合わせ — 鍛錬場にて

早朝の鍛錬場。

まだ誰も訪れていない静けさの中、アリエスは一人で素振りを続けていた。規則正しい戦斧の風切り音が、冷たい空気を震わせている。そこへ、のんびりとした足取りで銀髪青年が現れた。

「やあ、アリエス。朝から精が出るね」

蛇遣い——オフィは、いつもの人を食ったような笑みを浮かべて言った。

アリエスは戦斧を止めない。紅い瞳も向けない。

「……何の用だ、蛇遣い」

「ただの挨拶さ。それより、手合わせしない？ 見てたら体が鈍ってきそうで」

オフィが手にした鞭を軽くしならせる。アリエスはようやく戦斧を構え、向き合った。

「いいだろう。手加減はせん」

その言葉と同時に、戦斧が唸りをあげて振り下ろされる。オフィは鞭で受け止め、軽やかにかわす。金属と革がぶつかり合う鋭い音が、鍛錬場に響き渡った。

戦斧と蛇の鞭が幾度も交錯する中、オフィが何事もないように口を開いた。

「そういえば君、星の姫にずいぶん入れ込んでるみたいじゃないか」

「……何の話だ」

アリエスの口調が、ほんの少しだけ鋭くなる。

「とぼけなくても。僕は医神だからね、わかるんだよ。君、ここ数日、すごく生命力が高まってる。星紋も活性化してる」

「契約者のそばにいと力が増幅される。それだけだ」

アリエスは機械のように言い放つ。

「それだけかな？ 君、恋愛なんて興味ないって顔してるけど」

「恋愛など弱者のすることだ。俺は戦神だ。戦場で戦果を挙げることをだけを考えている」

振り下ろされた戦斧を、オフィの鞭が絡めとる。ぎちぎちと軋む音。

「へえ。でも彼女のこと、放っておけないんだろう？」

その瞬間——アリエスの戦斧が、完全に止まった。

沈黙が鍛錬場を支配する。アリエスはしばらく無言で、自分が握る戦斧の柄を見つめていた。やがて、ぽつりと、絞り出すように言った。

「……あいつは、変わっている。俺の傷を心配した。戦場でそんなことをされたのは初めてだ」

オフィは鞭を緩め、首をかしげた。

「それがどうしたの？」

「わからん。どう接すればいいのか、わからんのだ。俺はこれまで、誰かと——女と——こういう関わりを持ったことがない」

◆ その言葉は、戦場の鬼神のものとは思えないほど、かすかに震えていた。オフィも鞭をしまい、手を止める。口元に浮かべた笑みは、からかうものではなかった。

◆ 「悩める戦神、か。天空始まって以来の珍事だ」

「……俺は戦場に帰りたい。戦いだけをしていた頃の方が、ずっと楽だった」

アリエスの声には、紛れもない本音が混じっていた。

「でも君は、戦場に逃げたりしない。違うか？」

◆ オフィの問いに、アリエスは答えない。答えられない。その沈黙を、オフィは肯定と受け取った。

◆ 「ま、彼女のことは僕に任せてよ。君は君のやり方で、ゆっくり覚えていけばいい。恋愛を」

「……覚えるものなのか、これは」

「少なくとも君は、学び始めてるよ」

オフィは鞭を腰に巻きつけ、くると背を向けた。歩き出そうとして、立ち止まる。

「また手合わせしよう。次は君が、もう少し人間らしくなった頃にね」

軽やかな足音が遠ざかっていく。鍛錬場に再び静寂が戻った。

一人残されたアリエスは、しばらく戦斧を見つめていた。冷たい鋼が、星明かりを受けて鈍く輝いている。彼は深く息を吸い、もう一度戦斧を握り直した。

風切り音が、再び鍛錬場に響き始める。

夜伽——そんなに俺を高ぶらせて、どうするつもりなんだ

それから数日。アリエスはあなたを避け続けていた。

鍛錬場に行けば「来るな」と言われ、回廊で会えば無言で通り過ぎる。それなのに、あなたが他の神と話していると、遠くからじっとこちらを見ている——その矛盾に、あなたの不安は募るばかりだった。

自室の窓辺で、あなたはひとり呟いた。

「剣の鍛錬どころか、神殿に隔離されちゃった……。ずっと距離を置かれてるの、感じるし、もう無理なのかな……。私、帰りたいな、現実には。あんなに露骨に避けられてるのに『真実の愛』なんて見つけられる気がしないよ——」

右手の甲に刻まれた星紋を見つめながら、ぼんやりと考える。最初は「力の増幅装置」で十分だったはずだ。契約者の務めを果たし、オフィの力を取り戻す手助けをする——ただそれだけの関係。なのに、いつの間にかあなたは、彼に認めてほしくなっていた。

「ほかの神殿の神様は……？　なんでアリエスさんなんだろう……」

オフィは「星紋が導く」と言った。でも、こんなに不器用で、戦うことしか知らなくて、危険だからと遠ざける人を——どうして自分は、こんなにも気にかけているんだろう。

答えは出ない。ただ、胸の奥がずっと痛いままだった。

——そして、あなたは決意する。

「……うん、こうなったら」

その夜。あなたはこっそりオフィに頼んでおいた、勝負用の下着を取り出した。

透け感のある黒いレースのベビードール。普段は絶対に選ばないような、大胆なデザイン。鏡の前で身につけてみるが、自分でも似合っているのかわからない。レースが肌に張り付き、胸元がひらりと揺れるたび、心臓が早鐘を打つ。

(……こんなの、私が着てていいのかな。いや、でも——)

鏡の中の自分の顔が、羞恥で赤く染まっている。それでもあなたは深呼吸を一つして、気持ち固めた。

「よし……夜伽します！ これでダメなら諦めよう……」

自分に言い聞かせるように呟いて、あなたはアリエスの私室へと向かった。

廊下を歩く足音だけがやけに大きく響いて、心臓がうるさい。星明かりが冷たい石床に青

い影を落とす中、一步一步が重い。下着のレースが肌に触れるたび、自分がとんでもないことをしている気がして、頬が熱くなった。もしかしたら彼に怒られるかもしれない。追いつ返されるかもしれない。それでも——このまま何も変わらないよりは、とあなたは歯を食いしばった。

彼の私室の扉の前で立ち止まる。しばらく躊躇してから、コンコンとノックした。

——コン、コン。

室内から低い声が返ってくる。

「……誰だ」

「私です」

一瞬の沈黙。そして扉が開かれた。

そこに立っていたのは寝間着姿のアリエスだった。戦鎧を脱いだ彼は、いつもより少しだけ細く見えた。逆立った赤髪も幾分落ち着き、無防備な姿がかえって彼の精悍な顔立ちを際立たせている。あなたの姿を認めた瞬間、紅い瞳がわずかに見開かれた。

「……何の用だ。来るなと言ったはずだ」

彼の声は低く、警戒を帯びている。しかしその瞳は、あなたの顔から一瞬も離さなかった。

「あの、私……その……」

言いながら、あなたの身体は震えていた。勇気を振り絞ってここまで来たものの、いざ本人を前にすると、何をどうすればいいのかわからない。服の上からでも透けてしまいうような下着が、いまはむしろ心細い。彼にどう見えるか、見られるか——考えるだけで、胸の奥がきゅうつと締まる。

あなたは俯いたまま、絞り出すように言った。

「……夜伽を、しようと思って」

「——は？」

アリエスは言葉を失ったようだった。紅い瞳が数度まばたきを繰り返す。

「だって、このままじゃ何も進まないし、私、アリエスさんに避けられてるし……もう帰ったほうがいいのかなんて……でも、私は——」

言葉が続かない。下着を見せる余裕もなく、ただ震えながら立ち尽くすあなたを見て、アリエスは深く息を吐いた。観念したような、諦めにも似た吐息だった。

「……入れ」

あなたはおずおずと部屋に足を踏み入れた。

私室に通されたあなたは、寝台の端にちよこんと座らされた。アリエスは壁に背を預け、腕を組んであなたを見下ろしている。その間にも、あなたの胸元からちらりと覗くレースの縁が、自分でも気になる。彼に見えているのか、見えていないのか——その緊張で、肩がぎゅっと縮こまる。

沈黙が重い。やがて彼が口を開いた。

「夜伽とはなんだ」

「えっと……その……神殿に伝わる、契約者の務めというか……」

「そんなものは初耳だ」

アリエスの紅い瞳が、少しだけ細められる。からかっているのか、それとも本当に知らないのか——その表情からは読み取れない。

「……嘘です。自分で考えました」

正直に白状すると、彼は「そうか」とだけ言って、また黙り込んだ。

気まずさに耐えきれず、あなたは俯いたまま本音をこぼした。

「……もう、私じゃダメなのかなって。アリエスさんはずっと避けてるし、危険だって言うし……ほかの神様のところに行ったほうがいいのかなんて」

「……他の神だと？」

その声が、少しだけ低くなったことにあなたは気づかない。壁に預けていた背が、わず

かに浮いたように見えた。

「でも、オフィさんは『赤い糸でつながってる』って……なんでアリエスさんなんだろうって、私も思います。もっと優しい神様だっているだろうし、話しやすい人も——」

「もういい」

低い声が、あなたの言葉を遮った。

顔を上げた瞬間、アリエスが動いていた。気がつく、彼はあなたの目の前に片膝をつき、紅い瞳がまっすぐにあなたを見上げている。戦場で誰にも膝を折らなかった戦神が、今、あなたの前に跪いている——その事実、あなたは息を呑んだ。

「……すまん」

「え？」

「避けていたのは、俺の都合だ。お前が怖かった。お前に触れる自分が、制御できなくなり
そうで——怖かった」

彼の声は掠れ、言葉の一つ一つが絞り出されるようだった。紅い瞳が、かすかに揺れて
いる。

「アリエス……さん」

あなたが名前を呼ぶと、彼は目を細めた。

「だから、帰るな。他の神のところにも行くな。……俺が、なんとかする」

その言い方があまりにも不器用で、あまりにも真剣で——あなたは思わず笑ってしまっ
た。笑いながら、涙がこぼれた。自分でも、なぜ泣いているのかわからなかった。でも、胸
の奥に溜まっていた何かが、ようやく溶け出したような気がした。

「……なんとかするって、何を？」

「……まだ、わからん。だが」

彼の手が、あなたの頬に触れた。戦斧を握る手とは思えないほど、いつもよりずっと優しい手つきだった。指の腹がそっと涙を拭い、その温もりが頬に広がる。

「お前が来てくれて、よかった」

その瞬間、あなたの身体から力が抜けた。緊張の糸が切れ、倒れ込むようにアリエスの胸にぶつかる。とっさに彼が支えようとした手が背中に回され、そのままふたりは寝台の上に崩れ落ちた。

気がつけば、視界いっぱいのアリエスの顔がある。鼻先が触れ合うほどの至近距離。紅い瞳が驚きに見開かれ、互いの吐息が混ざり合う。

そして――彼の視線が、あなたの乱れた襟元に落ちた。

露わになった鎖骨。その下に覗く黒いレース。透け感のある薄い布地が、胸のふくらみを包み、星明かりを受けてかすかに煌めいている。

アリエスの動きが、完全に止まった。

（……なんだ、これは）

アリエスは呼吸の仕方を忘れていた。

視界を焼く黒いレース。その奥に透ける肌の白さ。星明かりを受けて、鎖骨のくぼみに小さな影が落ちている。

（夜伽。夜伽だと、お前は言ったな）

――そうだ。最初から、そのつもりで来たんだな。この格好で、俺の部屋に。俺を誘うために、わざわざ。

ぐるりと目が回るような興奮が、背骨を駆け上がる。同時に、腹の底から熱い塊がせり上がってきた。

（そんなに俺を、高ぶらせて）

（それで、どうするつもりなんだ――？）

紅い瞳が、あなたの胸元に釘付けになっている。唇がかすかに開き、何かを言おうとして言葉にならない。喉が上下し、耳の先が燃えるように赤く染まっていく。

「……なんだ、それは」

やがて絞り出した声は、掠れて、震えていた。

あなたは真っ赤になって顔を覆った。

「これは、その……夜伽用の、勝負下着というか……」

「……知らん。そんなものは知らん」

「知らなくていいです。忘れてください。というか、今すぐ——」

「忘れられるか」

低い声が、あなたの言葉を遮った。

「お前が、その格好で俺の部屋に来た。それだけで、俺がどれだけ——」

言いかけて、彼は奥歯を噛み締めた。こめかみに青筋が浮き、握りしめた拳がシートをぎりりと絞る。

「……俺を、試すな」

◆ 今にも襲いかかりそうな獣の気配を必死に抑え込もうとしている。荒い息があなたの首筋にかかり、そのたびに肌が粟立った。腰のあたりに、彼の熱く硬い昂ぶりが押しつけられているのを感じて、あなたの心臓が早鐘を打つ。

「……試して、ないです」

震える声で、あなたは言った。

「ただ、もう無理なのかなって思っ……避けられてるから……だから、これでダメなら諦めようと……」

「……諦める？」

その言葉に、アリエスの動きが止まった。紅い瞳がすうっと細められる。

「……お前は俺を諦めるのか。他の神のところに行くのか」

「え……？」

「言ったな。ほかの神様のところに行ったほうがいいのかなって」

あの時のあなたの言葉が、彼の耳には届いていた。そして今もまだ、その言葉が胸の奥に刺さったままなのだとわかる。低く、唸るような声だった。

「……そんなこと、許せると思っているのか」

「ちが——」

「お前は俺の契約者だ。俺の星紋を持っている。俺のハンカチを持っている。なのに、他の神だど？」

彼の手が、あなたの頬を挟んだ。戦斧を握る手が、今はあなたの顔を固定し、紅い瞳が間近から覗き込む。

（帰るなど言った。他の神のところに行くなど言った。それでもお前は、諦めると言うのか――？）

「……そんなこと、許せるわけがない」

その声には、彼自身も気づいていない独占欲が滲んでいた。

（俺は、こんなにもお前に執着しているのに。お前は、それを知らないのか。知らないから、そんな格好で来て、諦めようなんて言えるのか）

「……アリエス、さん」

あなたが名前を呼ぶと、彼の喉が上下した。紅い瞳の奥で、理性と衝動がせめぎ合っているのが見える。

「……………いいのか」

「……え？」

「俺は、怖いぞ」

彼の声が、恐ろしいほど静かになった。

「一度触れたら、もう止められない。そんな自分がわかっている。それでも——お前は、俺に触れさせてくれるのか」

あなたは、彼の紅い瞳をまっすぐに見つめ返した。その答えに、もう言葉はいらなかった。

あなたの手が、アリエスの頬に伸びる。そっと触れたあなたの指に、彼は目を閉じた。戦神が、ただの男の顔になった瞬間だった。

（ああ——もう、だめだ）

アリエスの中で、何かが切れた。

「……もう、加減はできないぞ」

それが最後の警告だった。

|

彼の手が、あなたの身体の下に差し込まれる。片手で背中を支え、もう片方の手で後頭部を抱え込む。気がついた時には、あなたはアリエスの腕の中にすっぽりと包み込まれていた。

「……こんなものを、着てきたんだな」

彼の指が、ベビードールの肩紐をそつとなぞる。かすかな布擦れの音が、静かな部屋に

やけに大きく響いた。指の腹が鎖骨のカーブをたどり、レースの縁をゆっくりと下ろしていく。

（これは、俺のために着てきたのか）

（誰のためでもない——俺の、ために）

その事実が、彼の胸の奥を熱くした。

「……きれいだ」

肩紐が腕まで下ろされ、胸元のレースがはらりと緩む。露わになるあなたの肌に、彼は息を呑んだ。

黒いレースのベビードール。こんなものがあることすら知らなかった。だが、それが今、自分のために脱がされようとしている。お前が、自分の意思で。

「……これを、俺の前で」

下着のホックを外す手つきは、初めて剣を握った時よりも慎重で、初めて戦場に立った時よりも緊張していた。戦神にあるまじき震える指。それでも、あなたはそんな彼の手を優しく見つめている。

「……………すごく、緊張する」

思わず本音がこぼれた。そんな彼に、あなたは小さく笑う。

「私です」

その言葉に、ふっと彼の口元が緩んだ。

——これが、アリエスの初めての笑顔だった。

レースが完全に取り払われ、あなたの胸が露わになる。星明かりを浴びて白く浮かび上がるふくらみ。淡い桜色の頂が、緊張と夜気がかすかに震えている。

「……………きれいだ」

彼はもう一度、そう呟いた。

（こんなにきれいなものが、この世にあるのか）

（これが——お前なのか）

「……………触るぞ」

断りを入れてから、彼の大きな手があなたの胸をそっと包み込んだ。指の腹がふくらみの輪郭を確かめるようになぞり、手のひら全体でゆっくりと持ち上げる。そのたびに、あ

あなたの身体が小さく跳ねた。

「……手、震えてる」

「……当然だ。こんなことは初めてだ」

「……アリエスさん、もしかして」

あなたの言葉の続きを、彼は遮らなかった。ただ、耳の先を赤くして、あなたの胸に唇を寄せた。

（初めてだ。誰かに触れたいと思ったことも、誰かに触れられたいと思ったことも——お前だけだ）

「……悪いか」

「……ううん」

あなたが首を振ると、彼はほっとしたように目を細め、それから——そっと、胸の頂に口づけた。

「……あ、♡」

熱く湿った感触に、あなたの口から甘い声が漏れる。驚いて口を押さえるあなたに、アリエスは顔を上げた。

「……いい。もっと聞かせろ」

「む、無理です……恥ずかし……っ♡」

言い終わらないうちに、彼の舌が頂をそっとなぞる。ちろちろと這い回り、固く尖った蕾を唇でそっと挟み込む。ぬるりとした感触に、あなたの背中がしなった。

「……甘い」

うつとりと彼が呟く。それがますます恥ずかしくて、あなたは手の甲で目元を覆った。

「……や、そんなこと言わないで……」

「本当のことを言っただけだ。お前は——どこもかしこも甘い」

「……っ、ひゃ、あ♡」

吸われる。軽く歯を立てられる。そのたびにびくびくと身体が跳ねて、自分のものとは思えない声が溢れ出す。アリエスは夢中だった。戦場で誰も聞いたことのないような切なげな声で、あなたの名前を呼びながら、胸の谷間に顔を埋める。

（これは——お前の味だ。お前の感触だ。お前の声だ）

（俺だけが知っている。誰にも、渡さない）

その独占欲が、彼の舌をさらに熱くさせた。

やがて彼の手が、あなたの腰へと伸びていく。下穿きの縁に指をかけ、ゆっくりと引き下ろした。脚を伝って下りていく布の感触がもどかしい。露わになった太腿に、彼の手のひらが吸い付くように触れた。

（もう、隠すものは何もない）

（お前のすべてが、俺のものになる）

「……すごく、緊張する」

もう一度、彼が言った。その声は戦場の鬼神ではなく、ひとりの男のものだった。

「……俺でいいのか」

「……アリエスさんが、いいんです」

あなたがそう言った瞬間、彼の中で何かが決壊した。

「……もう、逃がさないからな」

彼はあなたの脚をゆっくりと開いた。露わになった秘部は、すでに蜜であふれ、星明かりを受けて濡れ光っている。その光景に、彼はごくりと喉を鳴らした。

（これが——お前なのか）

「……ここも、きれいだ」

ぽつりと眩き、彼は自分の指をそっと蜜に濡らした。とろりと絡みつく熱い蜜の感触に、

彼は息を乱す。

「……お前も、俺がほしいのか」

「……っ、そんなの、わかりきってるじゃないですか……んっ♡」

彼の指が、そっと秘裂をなぞる。ぬちゆりと蜜が溢れ、指を伝ってシーツに染みを作った。そのまま彼は、あなたの入り口に指を沈めていく。

「……あ、あ……っ♡」

「……力を抜け。……そうだ、いい子だ」

異物感に身を強張らせるあなたを、彼は優しく宥めた。指がゆつくりと中を探り、内壁を優しく押し広げていく。そのたびに、あなたの中がきゅうきゅうと彼の指を締め付けた。

(すごい。お前の中は、こんなに熱くて、やわらかいのか)

(このまま俺を受け入れたら、どうなってしまうんだろうな)

「……アリエス、さん……も、いいです……から……っ」

「……もう少し、慣らさない」と

「……も、大丈夫……だから、アリエスさんがほしい……っ」

あなたの切実な声に、彼は息を呑んだ。紅い瞳の奥で、激情が燃え上がる。

(俺が、ほしい——?)

(お前が、俺を——?)



(そんなことを、そんな顔で言うのか)

「……あまり、煽るな」

低く、唸るような声だった。

彼はあなたの足をさらに大きく開かせ、自分の下肢を露わにした。すでに限界まで張り詰めた肉棒は、赤黒く膨張し、亀頭の先端からは先走りがとぷりと溢れている。青黒い血管が浮き上がり、熱を帯びて脈打っていた。亀頭の縁が傘のように張り出し、入り口に押し当てられただけで、あなたの蜜がまわりついてぬらぬらと光る。

「……っ、お前の中に、俺が入るのか」

「……はい……っ、きて……ください……っ♡」

あなたが腰を少し持ち上げると、亀頭がぬちゅりと入り口に沈み込む。その瞬間、ふた

り同時に息を詰めた。

（入る——お前の中に。俺のすべてが——）

アリエスは歯を食いしばり、ゆっくりと腰を進めた。ずぶずぶと肉棒があなたの中に飲み込まれていく。狭い。熱い。やわらかい。未知の感覚が彼を襲い、脳が白く焼き切れそうになる。

「……く、う……っ」

「……あ、ああ……っ♡」

最奥まで達した時、あなたの中がぎゅうっと彼を締め付けた。その締め付けに、彼は危うく達しそうになるのを必死で堪える。

「……動くぞ。……いいいな」

◆ 返事を待たずに、彼は腰を引き、そして再び奥まで突き入れた。ぐちゅ、ぬちゅ、という粘ついた水音が静かな部屋に響く。ゆっくりと、確かめるように、彼は何度も抽送を繰り返した。そのたびにあなたの嬌声が高くなり、彼の名前を呼ぶ声が、自分でも恥ずかしくなるほど甘く溶けていく。

「……アリエス、さん……っ♡」

「……なんだ」

「……きもち、いい……です……っ♡」

「——きもちいい」

◆ その言葉に、彼の理性が完全に吹き飛んだ。

「……っ、俺もだ……俺も、気持ちいい……っ」

腰の動きが速くなる。奥まで突き入れては引き、また奥まで——その繰り返しがだんだん激しさを増していく。ぐちゅぐちゅと水音が卑猥に響き、互いの肌がぶつかる小気味良い音が部屋に満ちた。汗が混ざり合い、体温が上がっていく。彼の背中にあなたの爪が食い込み、あなたの脚が彼の腰にきつく絡みついた。

（すごい。お前の中は——俺をこんなふうにするのか）

（戦いでも、勝利でも、こんな快感は知らない）

（こんなのは——お前だけだ）

「……お前のせいだ……っ」

「……え……っ♡」

「お前が……俺を、こんなふうにした……っ」

荒い息の合間に、彼は言葉を紡ぐ。その声は切実で、ほとんど泣いているようにも聞こえた。

「……こんなに誰かをほしいと思ったことなんて、なかった……っ」

「……アリエス……さん……っ」

「……お前のせいだ。お前が、俺を変えた……っ」

（そうだ。全部、お前のせいだ）

（こんなに高ぶるのも、こんなに執着するのも、こんなに——愛おしいと思うのも）

「……責任を、取れ……っ」

ぐっ、と奥まで突き入れられた瞬間、あなたの身体が大きく跳ねた。最奥の一番敏感な場所を亀頭がぐりぐりと抉り、子宮口がきゅうっと吸い付く。あなたの中がさらにきつく締まり、彼の肉棒に絡みついた。

「……あ、あ、い、いく……っ♡」

「……俺も、もう……っ」

彼はあなたの腰をしっかりと掴み、最後の抽送を繰り返した。荒い息が重なり、互いの名前を呼び合う声がぐちゃぐちゃに混ざり合う。

「……一緒に、いこう……っ」

「……はい……っ、はい……っ♡」

「……お前の、中に……出すぞ……っ」

「……きて……っ、アリエスさんの、ほしい……っ、あ、あ、ああ——っ♡♡」

あなたの絶頂の瞬間、アリエスは腰を深く押し込んだ。最奥で肉棒が膨張し、熱い精がどくどくとあなたの中に注ぎ込まれる。

（出ている——俺の精が、お前の中に）

（お前が、俺のものになる）

「……っ、く……あ……っ♡」

「……は……っ、はあ……っ」

荒い息が静まるまで、ふたりは動けなかった。彼はまだあなたの中に自分を埋めたまま、

あなたの額に自分の額を押し当てる。汗で張り付いた前髪をそっと払いながら、彼は尋ねた。

「……痛くなかったか」

「……少しだけ。でも、だいじょうぶ」

あなたが微笑むと、彼はほっとしたように息を吐いた。それから、あなたの頬に手を添え、そっと口づける。触れるだけの、やさしい口づけだった。

「……ありがとう」

その言葉に、あなたは目を見開いた。戦神アリエスが、誰かに礼を言うところを誰も見たことがない。

「……俺のために、こんな格好をしてきてくれて。怖かったらうに」

「……でも、アリエスさん、私が他の神様のところに行くかもって、すごく怒ってましたよね」

「……怒っていない」

「怒ってました」

「………少しだけ、な」

ムツとしたように言う彼に、あなたは思わず笑ってしまった。つられて彼の口元も少しだけ緩む。

「……もう、どこにも行くな」

彼があなたの手を握りしめる。その手はさっきまであなたの中にいた手で、まだ少しだ

け濡れている。でも、それがかえって妙に嬉しくて、あなたはこくりと頷いた。

「……こんなに俺を高ぶらせて、どうするつもりだったんだ」

「……え？」

「お前のせいで、俺はもう、お前なしではいられなくなった」

彼の紅い瞳が、じっとあなたを見つめている。そこに浮かんでいるのは、戦神の顔ではなく、ただの——恋に落ちた男の顔だった。

「……一生、責任を取ってもらうからな」

そう言って、彼はもう一度あなたを抱きしめた。戦斧を握る腕が、今は世界で一番やさしい檻になって、あなたを包み込む。

(誰にも渡さない)

(お前は——俺のものだ)

胸の中で、彼は静かにそう誓った。そしてそれは、彼の知らないうちに口から漏れていったのかもしれない。あなたが彼の背中に腕を回し、「……うん」と小さく返事をしたから。

——その夜、あなたの勝負下着は役目を終えて床に落ちた。

そしてふたりは、長い夜を明かした。何度も名前を呼び合い、何度も口づけ、何度もひとつになった。戦神の体力と、彼に応えたいと思うあなたの心が、夜の長さを忘れさせたのだ。

星明かりだけが、ふたりの寝台を静かに照らしていた。

—

◆ 翌朝の鍛錬場にて

翌朝。鍛錬場に現れたあなたを見た瞬間、アリエスの戦斧が大きくぶれた。空を薙いだ刃が、ガツンと床を叩く。

「……来たのか」

「来ました。避けられても来ます」

あなたが言い放つと、彼はしばらく黙り込んだ。それから、思い切ったように口を開く。

「……あの布は、もう着ているのか」

「着てませんよ！ 今日普通の下着です！」

「……そうか」

アリエスは戦斧を握り直した。でもその手は、まだ少しだけ震えている。あなたはその震えを見逃さなかった。昨夜のことを思い出しているのだろうか——自分もつられて頬が熱くなるのを感じながら、あなたは慌てて木剣を手を取った。

彼はあなたに背を向け、素振りを再開する。規則正しい刃音が鍛錬場に響き始めた——そんな中、風に乗って、かすかな独白があなたの耳に届く。

「……絶対に、ほかの人の前で着るんじゃないぞ」

無言の先回り

あの夜から、アリエスの行動には少しずつ変化が現れ始めていた。

最初は偶然だと思った。鍛錬場への通り道でよく会うようになったのも、神殿の回廊でばったり顔を合わせるのも。牡羊宮とあなたの宮はそれなりに距離があるはずなのに、気がつけば彼はいつもあなたの近くにいた。

そして、あなたが他の神と話している時だった。

まだ訪ねたことのない宮の主が、あなたに興味を持って声をかけてくる。回廊で立ち話をしていると、ふと背中に感じる熱のような気配。振り返るより先に、いつの間にかあなたの前に立っている赤い髪の男がいた。

アリエスだった。

「……なんだ、お前か」

相手の神に言うでもなく、低く呟く。戦斧は持っていない。しかし全身から放たれる殺気のようなものが、自然と相手を遠ざける。睨んでいる自覚すらない。紅い瞳はただ、あなたと相手を交互に見ているだけだ。でもその無言の圧力に、相手の方が先に「じゃあ、また」と退散していく。

「邪魔が入ったな」

アリエスはそれだけ言うと、あなたの顔も見ずに歩き出す。だがその歩みは遅く、明らかにあなたがついてくるのを待っている。

嫉妬という言葉を、彼はまだ知らない。恋愛を「弱者のすること」と言い切った自分の言葉と、あなたの視界から他の男を排除したいという衝動が、彼の中でどう結びつくのか。彼はまだその答えを持っていなかった。

ただ、あなたの目に映るのが俺だけでいい——そう思ってしまう自分を、彼は「戦友を守る当然の行動」だと本気で信じているのだった。

無自覚な尋問

【ヒロイン視点】

あの出来事から数日が経っていた。

アリエスが他の神と私のあいだに無言で割って入る——そんなことが何度続いた後、今度は少し違うことが起きた。

その日、私は回廊とある神様と立ち話をしていた。十二宮のひとつ、確か魚座の宮の関係者だったと思う。用件はたわいないものだった。

「星花が今年は特に美しいと評判だね。よければ君の宮にも分けてもらえないかと思って」

「星花、ですか。私の宮にも少し咲いてますけど——」

「ああ、やっぱり。アリエスの宮は鍛錬場ばかりで花のひとつもないからね。君が来てから、少しは華やいだんじゃないか？」

他愛のない世間話。天気の話、星花の話、ほんの数分の立ち話。それだけだった。

でも——その夜のことだ。

コン、コン。

私室の扉がノックされた。時計を見ると、もうかなり遅い時間。誰だろうと扉を開けると、そこにはアリエスが立っていた。戦鎧はつけておらず、簡素な寝間着姿だ。逆立った赤髪が、星明かりを受けて影を作っている。

「アリエス？ どうしたの、こんな時間に」

彼はしばらく私をじっと見つめ、それから低く言った。

「……少し、話がある」

「え？ あ、うん、どうぞ」

彼は部屋に入ると、壁際に立ったまま動かない。ソファに座るでもなく、ただそこに立って、私を見下ろしている。沈黙が重い。私は胸の前で両手を握りしめながら、彼の次の言葉を待った。

「……今日はよく話をしていたな」

ぼそりと、彼が言った。

「え？」

「回廊で。あの、魚座の」

ああ、立ち話のことか。私は少しほっとして答えた。

「星花のことで。私の宮に咲いてるのを分けてほしいって——」

「何を話した」

「だから、星花を——」

「それだけか」

彼の声は低く、平坦だった。でも、その紅い瞳は私から決して離れない。まるで、獲物を逃がすまいとする狩人のように。



「それだけ、ですけど……」

私は少し戸惑いながら答えた。本当にそれだけの話だ。なのに、アリエスはしばらく黙り込み、それからふいと視線を逸らした。

「……そうか」

——帰るんだろうか。普段はそうだった。質問だけして、背を向けて。でも、今日は違った。

彼はまだそこに立っている。壁に手をつき、俯いたまま、何かを必死に堪えるように。

「アリエス……?」

「……違うんだ」

ぼそりと、絞り出すような声が聞こえた。

「違うんだ。こんなことを言いに来たんじゃない。あの男がお前に何を話したのか、ただそれだけを聞くつもりだった。それで——それで帰るつもりだった」

彼はゆっくりと顔を上げた。紅い瞳が、星明かりを受けて揺れている。そこには、戦神の凛々しさも、鍛え上げられた自制心もなく——ただ、どうしていいかわからずに立ち尽くす、ひとりの男の姿があった。

「なのに、聞いたら、もっと苦しくなった。あの男の顔を思い出すだけで——お前がぁいつに笑いかけていたのを思い出すだけで——」

言葉が途切れる。彼はぎゅっと拳を握りしめ、壁を軽く叩いた。力が入りすぎていない、それでも必死な仕草だった。

「……俺は、どうすればいい」

彼の声が、かすかに震えている。

「わからないんだ。こんなことは初めてだ。誰かをお前から遠ざけたいと思ったことも、誰かにお前を取られるかもしれないと怖れたことも——全部、初めてだ。戦場では、どうすれば勝てるかわかる。どうすれば敵を倒せるかもわかる。なのに——お前のことになると、何もかもわからない」

彼は一步、私に近づいた。

「教えてくれ。俺は、どうすれば、この胸のざわつきを鎮められる。どうすれば、他の男がお前を見ることすら許せるようになる。どうすれば——お前が俺だけを見てくれる」

そこで言葉を切ると、彼は自嘲気味に小さく笑った。

「……お前だけを、見ていたいと思う。他の誰にも、お前を見せたくない。そんなこと、許

されないとかわっているのに——考えるだけで、気が狂いそうになる」

「アリエス……」

私は彼の名を呼ぶことしかできなかった。胸の奥がきゆうと痛む。このひとは、本当に——何も知らないのだ。自分の感情にも、その扱い方にも、ただ必死で、まっすぐで。

彼の手が、おそろおそろ私の頬に伸びてきた。戦斧を握る無骨な手が、まるで壊れものを扱うように、そっと、やわらかく、私の肌に触れる。

「……お前に触りたい」

彼の声は、かすれていた。

「傷を手当てされたあの日から、ずっと——お前の指を思い出していた。お前の指が、俺のどこに触れても、俺は——」

紅い瞳が、揺れながら私を捕らえる。

「怖いかな？」

その問いは、私ではなく、彼自身に向けられているようにも聞こえた。

私は首を振った。

「怖くないよ」

そう言うと、彼の瞳がわずかに見開かれ、次の瞬間——引き寄せられていた。

「……っ」

気がつけば、背中が壁にふれていて、目の前には彼の顔がある。至近距離で見つめ合う。

紅い瞳は、熱を帯びて、でもどこか泣きそうで。

「俺は——怖い」

彼がぼつりと言った。

「お前に嫌われるのが、何より怖い。俺のこの気持ちだが、お前を縛ってしまうのが怖い。でも——それ以上に、お前を他の誰かに渡すのが、怖い」

「アリエス……」

「名前を、呼ぶな」

彼は苦しそうに眉を寄せた。

「そんな声で呼ばれたら——もう、止まれなくなる」

その言葉の意味を考えるよりも早く、彼の唇が私のそれに触れた。

最初は触れるだけの、ためらいがちな口づけ。戦場で幾千の敵を屠ってきた男が、たつたひとつの口づけにこれほど臆病になるなんて——そう思うと、胸の奥が熱くなった。

「……やわらかい」

彼がうわごとのように呟く。

「もつと——いいか」

それは許可を求めるといふより、自分の欲望に踏み切るための、ぎりぎりの問いかけだった。

私は答えのかわりに、彼の寝間着の襟をそつとつかんだ。

それが合図になった。

二度目の口づけは、最初とは違った。彼の舌が私の唇を割って入り込み、おずおずと、でも確かな渴きをもって私の舌を探り当てる。ぬるりと絡みつく感覚に、背筋が震えた。彼の吐息が熱い。荒い。まるで戦場で敵と斬り結んでいるかのような——でも、その手つきはどこまでもやさしくて、壊してはいけないものを扱うみたいに、私の腰を抱き寄せる。

「……ん、あ……」

鼻にかかった声が漏れる。その声に、彼の腕の力が一瞬強くなった。

「……もっと聞かせろ」

耳元でささやかれ、首筋に唇を落とされる。ちゅ、と吸い上げるような口づけに、身体がびくりと跳ねた。

「お前の声で、俺を——もっと、いっぱいにしてくれ。他の誰のことも考えられないくらいに」

「アリエ、ス……っ」

「俺だけを、見てくれ。俺だけを、名前で呼んでくれ。他の男には、笑いかけてないでくれ——そんなことを言う資格が俺にないことくらいわかっている。なのに、言わずにいられない」

彼は顔を上げると、私の両手をそつと壁に縫いとめた。

紅い瞳が、熱に潤んでいる。

「……お前が欲しい」

掠れた声が、夜のしじまに溶けていく。

「お前のすべてが欲しい。身体も、心も、その声も、指先も——全部、俺だけのものにした
い」

「そんなの、ずるいよ……」

私は笑おうとしたけれど、声が震えた。だって、私の心はとくに決まっている。

「アリエスが他の誰かのものになったら——私も、嫌だ」

彼の瞳が、大きく見開かれた。

次の瞬間、抱きしめられていた。壁と彼の胸のあいだで、心臓の音がふたつ、重なるように鳴っている。

「……本気か」

「本気だよ」

「俺は——お前が思うより、ずっと重い男だぞ。一度手に入れたら、もう離せなくなる」

「知ってる」

彼はしばらく黙り込んでから、小さく、でもはつきりと笑った。それは、彼が初めて見せた、心からの笑みだった。

「……お前は、俺をどうかしてしまおう」

「お互いさまだよ」

私がそう言うと、彼はもう一度だけ、今度は額に、そっと口づけを落とした。

「——覚悟しろ。もう、誰にも渡さない」

そう囁くと、彼は私を横抱きにした。寝台へと歩きながら、彼の鼓動が腕を通して伝わってくる。速い。私と同じくらい、速い。

寝台に下ろされた私は、目の前の彼を見上げた。赤髪が乱れ、寝間着の襟元がはだけている。鍛え上げられた胸板と、その奥で脈打つ星紋が、かすかに光っていた。

「……綺麗」

思わず呟くと、彼は一瞬きょんととして、それから耳まで赤くした。

「お前、そういうことを平気で言うんだな……っ」

「だって本当のことだもん」

「……敵わない」

彼は苦笑しながら、そつと私の上に覆いかぶさった。肘をついて体重を支えながら、もう片方の手で私の髪を一房すくい、口づける。

「お前に触れるたびに、俺は俺でなくなる。戦神も、誇りも、何もかも——お前の前では、ただの男になってしまう」

「それが、嫌？」

「——嫌じゃない。むしろ、心地いいとさえ思っている。お前だけには、すべてを預けてもいいと」

彼の手が、私の寝間着の合わせ目に触れる。でも、すぐには開かずに、そこでじつと私の目を見つめた。

「怖くないか？」

さつきと同じ問い。でも今度は、本当に私に問うている。

「怖くない。アリエスだから」

「……わかっていないな、お前は」

彼はふっと息を吐き、それから――

「俺が、どれだけお前に触れたかったか。どれだけお前の指を思い出して、ひとりで自分を慰めたか。お前のせいで、俺は――」

そこで言葉を切ると、彼は私の耳元に唇を寄せた。

「教えてやる。俺がお前に、どれだけ支配されているかを」

その夜、私は彼のすべてを知った。

不器用で、でもどこまでもやさしい手つき。私の名前を何度も呼ぶ掠れた声。私の肌に触れるたびに震える指先。互いの星紋が共鳴し合って、部屋中が淡い光に包まれた。

「……愛してる」

絶頂の果て、彼が絞り出すように言った言葉を、私はきつと一生忘れない。

「お前を、愛している。俺だけのものに、させてくれ」

「……もう、とつくにそうだよ」

私がそう答えると、彼は泣きそうな顔で笑って、もう一度だけ、深く口づけた。

—
あの夜から、彼はときどき、私の部屋に来るようになった。

理由はいつも「なんとなく」だ。でも、本当はわかっている。彼はただ、私のそばにいたいだけなのだ。それを言葉にできないだけで。

そして、私もまた——彼の不器用な愛情を、腕の中に受け止め続けている。

『でも、嫌じゃない。私、どうかしてるのかな』

手帳に書いたあの言葉は、今では確信に変わっている。

——どうかしてるのは、お互いさまだ。

星明かりの下、隣で眠る彼の寝顔を見つめながら、私はそっと彼の赤髪に指を絡めた。

戦神アリエス。私の、愛しいひと。

ある朝

鍛錬場に向かう回廊で、私は偶然オフィに会った。彼はいつものように人を食ったような笑みを浮かべていたが、私の顔を見るなり、ふふ、と小さく笑った。

「最近、大変みたいだね」

「え？」

「アリエス、君の部屋によく訪れているだろう。夜遅くに」

「……なんで知ってるんですか」

「僕は落ちぶれていても元・神だからね。神殿の気配の変化には人よりは敏感なんだ」

オフィは銀の髪を揺らし、少しだけ声を潜めた。

「気をつけてね。ああ見えて彼、独占欲のかたまりだから」

「独占欲——でもアリエスは、恋愛とか興味ないって」

「恋愛に興味がなくても、君には興味があるんだろうね」

オフィはそれだけ言うと、軽やかな足取りで去っていった。

私はしばらくその場に立ち尽くし、それから小さく息をついた。独占欲——その言葉が、妙にしっくりきたからだ。

（でも、それを自覚してないから、あんなに不器用なんだろうな）

私は手帳をバッグにしまい、鍛錬場へと歩き出した。今日もまた、彼は何もなかった顔で戦斧を振るっているのだろう。昨日の尋問のことも、何も覚えていないかのように。

（でも、私は覚えてるからね）

そんなことを思いながら。

――

貸したマント

またある夜のこと。

あなたは薄着のまま神殿の回廊を歩いていて、天空の夜風に震えていた。星の海に囲まれた天空は、地上よりもずっと冷える。腕をさすりながら早足で宮に戻ろうとした、その時だった。

背後から、ばさりと重い布が肩にかけられた。

驚いて振り返ると、そこにはアリエスが立っている。彼が纏っていた炎のグラデーションのマントが、今はあなたの肩を包んでいた。鎧の上からでもわかるほど、彼の体温が布に残っていて、あたたかい。

「アリエス、でもあなたが寒いんじゃない——」

「俺は平気だ」

ぶっきらぼうに遮って、彼はあなたの顔を見ない。戦場で寒さに震えることなど何度も

あった。これくらい、どうということはない、と言いたげに。

「でも――」

「寒くない」

あなたの「アリエスは寒くないの？」を彼が否定する、妙な構図だった。彼は頑なにあなたの方を向かず、回廊の柱の向こうの星を睨むようにしている。でも、マントをかける手だけはやけに丁寧だった。肩からずれないように、ほんの一瞬间だけ留め金のあたりに指をかけて。

「……行くぞ」

歩き出す彼の背中を追いながら、あなたはマントの端を握った。炎の色をした布から、微かに彼の匂いがする。戦場の鉄と、汗と、それから何か、焦げたような、乾いたような――言葉にできない、彼の匂い。

その時、前を歩くアリエスが、ほんの一瞬だけ横を向いた。横目であなたをちらりと見る。マントに包まれたあなたの姿を、その紅い瞳が映す。

瞳が、かすかに揺らいだ。

何かを言おうとしたのか、唇がわずかに動いた。でも言葉にはならず、彼はすぐに前を向く。それきり、あなたの宮に着くまで、彼は一度も振り返らなかった。

「……いいいいいい」

宮の入り口で立ち止まり、あなたがマントを外して返そうとすると、彼は手で制した。

「明日でいい」

「え、でも——」

「明日、鍛錬場で返せ」

有無を言わさぬ声だった。でもそれは命令というより、明日も来る、という確認のように聞こえた。あなたが「わかった」と頷くと、彼は満足したのかしないのか、また無言で歩き去っていく。

マントのない背中では、いつもより少しだけ小さく見えた。

戦いの前夜

明日は天空の武闘会。十二宮の神々が威信をかけて競う大一番で、アリエスは毎回優勝をさらっていく絶対的な戦神だった。けれどその夜、あなたはなぜか寝つけず、冷たい回廊の空気を求めて宮を抜け出した。

満天の星が、天空の神殿を青く照らしている。柱の影に、ひとつの人影があった。燃えるような赤髪が、星明かりに透けて見える。

「アリエス……？」

彼もまた、眠れずにいた。戦いの前夜はいつもこうだ、と言いたげに肩をすくめる――が、その横顔はいつもと違って、何かに取り憑かれたように強張っている。あなたが隣に並ぶと、彼はしばらく無言で星を見上げていた。

やがて、ぼつりと言う。

「……お前を、連れて行こうかと思っていた」

「え？」

「明日の戦いが終わったら。どこへでも。俺と来い」

あまりにも突然で、あまりにも真剣な声だった。いつもの命令口調ですらない。まるで、ずっと心の奥で温めていた言葉を、ようやく口にしたかのような——そんな響きだった。

「それって……デート、かな」

あなたが少しだけ緊張をほぐそうと笑うと、アリエスはきよとした。紅い瞳がまばたきを繰り返す。

「……でえと、とはなんだ」

「えっと、ふたりで出かけて、楽しい時間を過ごすことで……つまり、その……恋愛的な」

「恋愛など、弱者のすることだと言ったはずだ」

「じゃあ、『ついてこい』ってどういう意味？」

あなたが首をかしげると、彼は口ごもった。何か言おうとして、やめて、また星を見上げる。その横顔が、いつもより少しだけ、苦しげに見えた。

しばらくの沈黙。星のまたたきだけが、ふたりのあいだを流れていく。

「……怖いんだ」

ぼつりと、彼が言った。

「え？」

アリエスが、怖い。その言葉が、にわかには信じられなくて、あなたは彼の横顔をまじまじと見つめた。彼はあなたを見ずに、遠くの星を睨みつけるようにして続ける。

「明日の戦いが、ではない。俺は戦場で怖れたことなど一度もない。敵を前にして震えたことなど、ただの一度も」

そこで言葉を切ると、彼はゆっくりとあなたに向き直った。紅い瞳が、星明かりを受けて濡れたように光っている。

「——お前を失うかもしれないことが、怖い」

「アリエス……」

「勝てば、俺はまた戦神だ。誰もが俺を称え、俺の名を呼ぶ。でも——もしそれで、お前から離れていくなら、そんな勝利に何の意味がある」

あなたは息を呑んだ。彼の声が、かすかに震えている。

「最近、ずっと考えている。俺が戦神であることと、お前のそばにいたいこと——そのふたつが、いつか衝突する日が来るのではないかと。お前は、戦いなど好まないだろう。血の匂いも、剣戟の音も、お前には無縁のものだ。なのに俺は——それしか知らない」

彼は一歩、あなたに近づいた。

「俺は、お前に何を返せる。俺にあるのは戦いだけだ。戦うことでしか、お前に誇れるものを示せない。戦って、勝って、その勝利を——お前に捧げることしか」

「それで、十分だよ」

あなたが言うのと、彼は苦しげに眉を寄せた。

「十分じゃない。俺は——お前にもっと、別のものを与えたい。お前が笑うような、やさし

いもの。お前の心をあたためるような、そんなものを。でも、俺の手は血に塗れていて、そんなものの掴み方すら知らない」

彼の手が、おそろおそろあなたの頬に伸びてくる。戦斧を握る無骨な手が、まるで壊れものを扱うように、そっと、やわらかく、あなたの肌に触れた。

「だから、せめて——俺の勝利だけは、お前にやる。誰にも渡さない。他の誰のための勝利でもない。俺が勝つのは、いつだって——お前のためだ」

「アリエス……」

「明日、勝つ。必ず勝つ。そしてお前は、その勝利を——俺ごと、受け取れ」

それは「好きだ」でも「愛している」でもなかった。しかし、戦いに勝つこととあなたを手に入れることが、彼の中で完全にひとつになっていた。戦神としての全存在を賭けた、あまりにも不器用で、あまりにも重い告白だった。

——でも、それだけでは終わらなかった。

「……っ」

気がつけば、あなたは柱に背を押しつけられていた。冷たい石の感触と、目の前に迫る彼の体温。紅い瞳が、間近であなたを捕らえる。その奥で、何かが燃えている。

「アリエ、ス……？」

「……少しだけ、触れてもいいか」

それは問いかかけの形をしていたが、彼の声はすでに限界を超えていた。戦いの前夜の昂奮と、あなたを前にした渴望と、明日への不安——すべてが混ざり合って、彼の自制心をぎりぎりまで削り取っている。

「少しだけ……お前に触れて、お前がここにいることを、たしかめたい」

あなたが答えるよりも早く、彼の唇があなたの額に触れた。それから、まぶたに、頬に、顎先に――壊れものを扱うようなやさしさで、次々と口づけが降ってくる。

「……お前の匂いだ」

彼があなたの首筋に顔を埋めて、深く息を吸い込む。

「俺を、落착かせる匂いだ。戦いの前はいつも昂奮で眠れなかったのに――お前のそばにいと、心臓がゆっくりになる。なのに、別の昂奮でおかしくなりそうだ」

「どっちなの、それ……」

あなたが苦笑すると、彼は顔を上げて、少しだけ口元を緩めた。でも、その瞳はまだ熱を帯びていて、冗談めかしていられる状態ではないことを物語っている。

「……なあ」

彼の親指が、あなたの唇の輪郭をそつとなぞった。

「明日、勝ったら——もっと、お前に触れてもいいか。今みたいな、こんなふうなことだけじゃなくて。もっと——お前のすべてに」

「……アリエス」

「ダメだと言われても、たぶん俺はもう止まらない。でも、お前の口から聞きたい。お前に、許してほしい」

その瞳があまりにも必死で、あまりにも切実で——あなたは、彼の寝間着の襟をそつとつかんだ。引き寄せるように、自分の方へ。

「……許すも何も、私——」

あなたはそこで言葉を切り、自分から背伸びをして、彼の唇に触れるだけの口づけをした。

「アリエスに触れてもらえるなら、いつだって、嬉しい」

彼の紅い瞳が、大きく見開かれた。次の瞬間——あなたは強く抱きしめられていた。骨がきしむほどの力。戦神の全力の抱擁。でもそれは、痛いほどにやさしくて、泣きたいほどに熱かった。

「……お前は、俺をどうかしてしまう」

耳元で、かすれた声がささやく。

「俺は——お前がいなければ、もうダメだ。戦う理由も、勝つ意味も、お前がいなければ何

もかもが空っぽだ。こんなことを思う自分を、弱いと思う。だが——それでもいい。お前がいるなら、弱くてもいい」

「アリエス……」

「お前だけは、絶対に失わない。明日、必ず勝つ。そしてお前を——俺だけのものにする」

彼はゆっくりとあなたを離すと、その手を取った。右手の甲にある星紋が、かすかに脈打つように輝いている。あなたの星紋と、共鳴するように。

「——戻るぞ。寒い。お前が風邪を引いたら、明日の戦いに集中できない」

「え、でもまだ——」

「ついでに——」

結局それで、あなたは宮まで送り届けられることになる。でも、来た時とは違って、彼はあなたの手を握ったまま離さなかった。回廊を歩くあいだじゅう、無骨な指があなたの指に絡みついて、まるで二度と離すまいとするかのように。

別れ際、あなたの部屋の前で、彼は立ち止まった。手を離し、振り返らずに言う。

「明日、勝つ。必ずだ。——観客席で、見ていてくれ」

それはあなたへの約束であり、彼自身への誓いでもあった。

でもそれだけでは終わらず、彼はくると向き直ると、あなたの額にもう一度だけ口づけを落とした。そして――

「――俺の勝利を見届けたら、その足でどこへでも行くぞ。覚悟しておけ。お前を、俺だけのものにするための、はじまりの日だ」

そう言い残して、彼は今度こそ背を向けて歩き去った。赤髪が星明かりに揺れる後ろ姿は、いつもよりずっと大きく、そして——どこか、吹っ切れたように晴れやかだった。

あなたは胸の奥が熱くなって、しばらくその場に立ち尽くしていた。

右手の星紋が、まだかすかに脈打っている。まるで彼の心臓の音が、ここまで届いているかのように。

（——明日、勝ったら、私はこのひとのものになるんだ）

その予感が、怖くないと言ったら嘘になる。でもそれ以上に——待ち遠しくて、あなたはなかなか寝つけそうになかった。

【第2章了】

勝利の夜、何回目かも忘れた口づけと指

【武闘会】

天空の大闘技場。十二宮の神々が威信をかけて競う武闘会は、天空で最も熱い戦いの場だった。

観客席を埋め尽くすのは、星々の精霊や、各宮に仕える無数の従者たち。幾重にも重なる歓声が、闘技場全体を揺るがしている。あなたはオフイに連れられて、観客席の最前列——十二宮の関係者だけが座れる特等席に腰を下ろしていた。

「すごい人……というか、すごい神様の数」

「天空の一大イベントだからね。みんな、戦神の勇姿を一目見ようと集まってくるんだよ」

オフィが隣で軽く手を振りながら説明する。あなたは闘技場の中央に立つアリエスを見つめた。赤と金の戦鎧が陽光を受けて輝き、肩に担がれた戦斧は闘技場の熱気を吸い込んで鈍く光っている。対戦相手は別の宮の守護神——巨軀を誇る戦士だった。

試合開始の銅鑼が鳴り響く。

最初に動いたのは相手だった。巨大な戦鎧を振りかぶり、アリエスに向かって真っ直ぐに突進する。観客席からどよめきが上がった。でも——あなたは息を呑む間もなく、次の瞬間を目にした。

アリエスが、消えた。

いや、消えたように見えただけだ。彼は最小限の動きで相手の剛撃をかわし、次の瞬間には相手の背後に回り込んでいた。戦斧が弧を描き、相手の戦鎧を弾き飛ばす。金属が悲鳴を上げ、巨体が地面に沈む——そのすべてが、ほんの数呼吸のうちに起こった。

「一撃……！」

誰かが叫ぶ。観客席が沸き返る。

「勝者、牡羊座の神、アリエス——」

審判が勝敗を告げる。あたりが歓声で沸き立つ。

あなたは立ち上がっていた。心臓が早鐘を打っている。アリエスの戦いは、あなたが鍛錬場で見ていた模擬戦とはまったく違う次元のものだった。彼が本気で戦う姿は——美しかった。研ぎ澄まされた刃のように、無駄がなく、速く、そして圧倒的だった。

次の相手も、その次の相手も、結果は同じだった。戦斧の一振りごとに観客席が沸き、対戦相手が膝をつく。最後の一撃が決まった瞬間、彼は戦斧を高々と掲げて勝鬨をあげた。その紅い瞳が真っ先に捉えたのは、敵将の姿ではなく——観客席の片隅で、息を詰めて見守

るあなただった。

(あ——私を、見た?)

たった一瞬の視線だった。彼はすぐに正面に向き直り、勝鬨を続けた。その広い背中には、戦場の神としての誇りと、研ぎ澄まされた闘気が揺らめいている。でもあなたには、その一瞬が永遠のように感じられた。勝利の熱さとは別の何か、あの紅い瞳の奥にかすかに灯っていた——そんな気がした。

【祝宴】

祝宴の広間には、十二宮すべての神々が集まっていた。酒杯を交わし、戦いの手柄話に花を咲かせる喧騒のなか、主役であるはずのアリエスの姿は、いつの間にか消えていた。

あなたは人混みを抜け出し、彼を探して回廊を歩いていた。祝宴に顔を出さないなんて、

らしくない。もしかして傷の手当てもせず——。

「アリエス？」

名を呼んだ瞬間、柱の陰から伸びてきた手があなたの手首を掴んだ。

「——っ」

引き寄せられるまま、あなたは誰もいない控えの間に連れ込まれた。背中が壁に触れると同時に、血と埃の匂いがあなたを包む。見上げれば、戦鎧に身を包んだアリエスが、荒い息を繰り返しながらあなたを見下ろしていた。

「アリエス、祝宴は——」

「そんなものはどうでもいい」

低い声が遮る。紅い瞳はいつもよりずっとぎらついて、戦場の昂奮をまだ冷ましきれずにいる。

「約束だ」

彼は一步、間合いを詰めた。両腕があなたの頭の横に置かれ、逃げ場がなくなる。

「俺は勝った。だから——お前は俺のものだ」

言葉が終わるか終わらないかのうちに、彼の顔が近づいた。

口づけは、あまりにも不器用だった。

戦場で敵を屠る時よりもずっと速い勢いで顔を寄せたものだから、がつんと鈍い衝撃があなたの前歯に響く。歯の根が痺れるような痛みと、その直後に感じた彼の唇の熱さ。そのギャップに、あなたの頭がぐらりと揺れた。

「っ——」

あなたが小さく声をあげると、彼は弾かれたように顔を離した。紅い瞳が、みるみるうちに動揺に揺れる。

「……すまん」

その謝罪の言葉が、あなたの前歯に自分の前歯をぶつけただけで、こんなにも簡単にこぼれ落ちる。彼は自分の額をあなたの額に押し付けたまま、鼻先が触れ合う距離で、荒い息を繰り返している。あなたの唇に、彼の吐息がかかるたび、自分の唇がかすかに湿っていくのを感じた。

（こんなつもりじゃ——でも、もう、止められない）

「……もう一度、していいか」

今度は、許可を求めた。

あなたが小さく頷くと、彼は二度目の口づけをした。さっきより少しだけ角度を変えて注意深く、それでもやっぱり震えながら。今度は前歯はぶつからなかった。

ちゅ……っ♡

代わりに、かさついた彼の唇の感触が、あなたの唇をそっと押し包む。戦神の口づけは熱かった。

（これが——お前の唇か）

やわらかい。熱い。そして、かすかに湿っている。戦場で彼が触れてきたすべてのもの。鋼、血、冷たい土——そのすべてと正反対の感触が、今、彼の唇の上にあった。その感触を逃すまいと、彼は何度も角度を変え、唇を食むように、押し付けるように、確かめ

るように——夢中であなたの唇を味わった。

ちゅ……くちゅ……ちゅば……っ♡

鼻先が擦れ合い、互いの吐息が混ざり合うたび、あなたの唇の内側の、さらにやわらかい粘膜がかすかに見えて、彼の理性がじりじりと焼き切れていくのを感じた。

ぬる……っ♡

彼の舌の先端が、おずおずとあなたの唇の隙間を濡らしていく。唾液が混ざり合い、ぬるりとした感触が互いの唇を伝い、ひとときわ深く唇が重なるたびに、くちゅ……っ♡と湿った音が静かな控えの間に響いた。

(もっ——もっ——と奥まで——)

ちゅる……っ♡ くちゅ……ぬる……っ♡

彼の舌が、あなたの唇の隙間を割ろうとする。その瞬間、あなたの口の中で、彼の味がほんの少しだけ広がった。戦場の埃と、鉄の匂いと、それから——ほんの少しの塩気。あなたは無意識に、彼の舌を受け入れようと唇を開きかけた。その時だった。

ちゅぷ……っ♡

唇を離れた瞬間、互いの唇を繋ぐ銀の糸が、星明かりにきらりと光った。アリエスはその光景に息を呑み、それから、おそろおそろ右手をあなたの身体に伸ばしてくる。鎧の手甲はすでに外され、素の指先があなたの鎖骨をかすめた。戦斧の重さを知り尽くした手が、今はまるで壊れ物に触れるかのように、あなたの肌の上を進んでいく。

（やわらかい——お前の身体は、どうしてこんなに柔らかいんだ、俺とは全然違う、別の生き物の様だ——）

鎖骨のくぼみを指先でそっとなぞり、首筋の細さに息を呑み、そして——

「……やわらかいな」

ぽつりと零した声は、戦場の鬼神のものとは思えないほど、かすれていた。

彼の指は鎖骨の窪みを確かめ、首筋をかすめ、そして服の上から、あなたの胸に触れる。手のひら全体で、そのやわらかな膨らみをそっと包み込む。その瞬間、彼の手が止まった。いや、止まってしまった。自分の手のひらに収まる、想像を絶するやわらかさと、その奥にある小さな硬さ。指がほんの少し動いたとき、布越しに伝わる肌の熱と、ふくらみの形が変わっていく感触。そのすべてが、彼の手のひらを通して、脳を直接焼いているかのようだった。

（なんだ、これは——俺の手が、俺のものじゃないみたいだ）

彼の手はやっぱり震えていて、でも、そこから逃げ出したくないと願う自分もまた、確かにあなたを求めていた。

「アリエス……？」

あなたが名を呼ぶと、彼ははっとしたように顔を上げた。紅い瞳が、潤んでいる。戦場の鬼神が、たったこれだけで――服の上からあなたの身体に触れただけで――限界を迎えようとしている。

「……くそ」

彼は齒を食いしぼり、あなたの肩に額を押し付けた。腰が、あなたの身体に押し付けられるように密着する。ズボンの前が、あなたの下腹部に当たる。布越しにも伝わるその熱と硬さに、あなたの身体もまた、かっと熱くなった。あなたの下腹部を押し上げるように脈打つ質量が、彼の切羽詰まった吐息と共に、あなたの芯を甘く痺れさせていく。

（お前が――お前が俺を、こんなふうにする――いとおしくて切なくて狂いそうになる――）

太く脈打つ肉棒は、すでに限界だった。布のなかで先走りが溢れ、下着をぐっしよりと濡らし、あなたの身体に押し付けられるたび、その湿り気が布を伝って広がっていく。背筋に電流のような快感が走り、腰が勝手に震えた。

「……すまん、俺は——」

言いかけた言葉が、途中で途切れた。

彼の身体が、大きく震える。腰がびくんと跳ねて、あなたの身体に押し付けられたまま、彼は絶頂に達していた。尿道が膨張し、熱い塊が駆け上がる。ズボンの布のなかで、ビュルルと勢いよく白濁が噴き出し、下着をさらに汚していく。ドクドクと何度も脈打ち、残りの精液を搾り出すように、腰が小さく跳ね続けた。

（こんなことで——お前に触れただけで——俺は——）

あまりにも早すぎる、あまりにも不器用な、生まれて初めての誰かとの交わりだった。荒

い息が、あなたの肩にかかる。しばらく動けなかった。彼はあなたの肩に額を押し付けたまま、恥ずかしさと悔しさと、それでもまだ収まらない昂ぶりに、震えていた。

「……足りん」

やがて、絞り出すような声が聞こえた。顔を上げた彼の紅い瞳は、まだ潤んでいて、でもその奥に、もっと深い飢えが揺らめいていた。

「足りん。こんなものでは、足りない」

（もっと、お前に触れたい——お前を、知りたい——）

戦斧を握る手が、今はあなたの手を握っている。強く、でも壊さないように。戦神アリエスが、生まれて初めて知った、あなたへの渴望だった。

—

アリエスの日記 二

今日も契約者は鍛錬場に来た。俺は追いついた。危険だからだと言った。

嘘ではない。俺は加減を知らん。あいつのような、か細くてやわらかいものを、どう扱えばいいのかわからん。壊してしまうかもしれない。

なのに——去っていく背中を見て、引き留めたいと思った。

武闘会に勝った。当然だ。だが、祝宴の酒より先に、あいつの顔を見に行った自分がいる。

口づけをした。歯をぶつけてしまった。次はもっと上手くやる。

俺は、あいつを危険だからと遠ざけた。なのに、俺はあいつに近づいている。自分でも、意味がわからん。



俺は、
何を考えているんだ。

